

【翻刻紹介】

藤原山蔭関連寺社縁起二種

―国立歴史民俗博物館蔵『久修園院縁起』―

福岡県八女郡大光寺蔵『飛形山大光寺縁起』―

日 沖 敦 子

要旨 国立歴史民俗博物館蔵『久修園院縁起』（写本一冊）、および、福岡県八女郡大光寺蔵『飛形山大光寺縁起』（写本一冊）の二種の寺社縁起を翻刻紹介する。いずれも、藤原山蔭関連の寺社縁起である。藤原山蔭の説話・伝承を踏まえ、本尊の由来を説いた寺社縁起は複数確認でき、未紹介のものも少なからず存在する。近世前期には縁起絵巻も制作されており、本誌第四号では、大阪府茨木市常称寺が所蔵する『総持寺縁起絵巻』を紹介した。また、第七号では、天理大学附属天理図書館が所蔵する『新長谷寺縁起』を紹介した。今回紹介する『久修園院縁起』は、かつて星田公二氏により紹介されたもの（久修園院所蔵本カ）であるが、国立歴史博物館蔵本とは、若干字句に異同があり、『飛形山大光寺縁起』と併せて翻刻することにした。『飛形山大光寺縁起』は近世中期のものであるが、未紹介の寺社縁起である。内容の詳細については、後稿に記したい。

キーワード…縁起、久修園院、大光寺、藤原山蔭

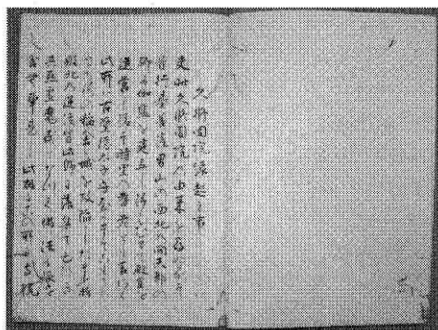
人間文化研究 第10号 二〇〇八年十二月

【凡例】

翻刻に際し、以下の方針を取った。

- 一、私に句改点を付し、読解の便宜を図った。
- 一、旧字体・異体字は、適宜、通行字体に改めた。
- 一、踊り字は「々」に改めた。
- 一、虫損汚損による判読不能箇所は□で示した。
- 一、私に傍記した部分については、全て丸括弧に括って示した。

（1）国立歴史民俗博物館蔵『久修園院縁起』



『久修園院縁起』（1オ）



久修園院（大阪府枚方市）

【書誌】

（所蔵）国立歴史民俗博物館蔵（高松宮家伝来禁裏本）八二〇、ウー六（形態）

写本一冊、袋綴、木瓜紋模様入表紙（見返）共紙（外題）「久修園院縁起」（打付・左肩）（内題）「久修園院縁起之事」（丁数）九丁（遊紙二紙含まず）（寸法）二八・六×二〇・四（字高）二二・二（料紙）斐紙（行数）半葉一〇行（蔵書印）なし（奥書）「当寺靈龜年中画縁起等、普広院殿御代被召置於殿中粉失畢。而今経公家御沙汰、以旧草模写之、可為将来龜鑑而已。大永四年二月吉日 青懂」（備考）久修園院は、大阪府枚方市にある真言律宗寺院。星田公二氏「研究ノート 山蔭中納言のことなど（Ⅲ）」（『同志社大学学院研究会報』第三号、一九七二）に、翻刻があり、内容に違いは見られない。但し、星田氏の翻刻によれば、末尾に「普広院殿―足利六代義教將軍／後柏原御宇／大永四年―至于文政三年凡二百九十七年青懂者何人坎可尋之」という張り紙があったとされており、翻刻の字句も歷博本と若干の違いがみられる。よって、星田氏が翻刻された「久修園院縁起」と、ここに翻刻する歷博本は別の伝本の可能性がある。なお、星田氏が翻刻された「久修園院縁起」の所蔵先は、氏の論文に記されておらず、未詳である。現在、所蔵の確認ができない久修園院所蔵の縁起を翻刻されたのかもしれない。

【翻刻】

久修園院縁起之事

夫此久修園院の由来を尋ぬるに、昔、行基菩薩、男山の西北の間、天部の郷に、伽藍を建立し給はむとて、殿堂を造営し給。于時、里の耆老とも言はく、此所は、古聖徳太子守屋かたてこもりしところの稲倉か城を攻陥したまふ時、敗北の逆徒、皆此郷に落集て亡ひき。其怨靈、

魔民となつて、仏法に恨を含む事甚し。此故にこの所に寺院」（一オ）成就しかたきのよし申伝る者也。若今寺を造立して長久ならしめんとならば、幾重の靈験無雙の本尊を安置して、魔の障礙を除給へしと。行基則野老の語に応諾して謂為、古役行者大峰の惡鬼邪神をおさめむかために、釈迦か嶽にして金対蔵王を祈り出し給へり。しからは、吾も釈迦か嶽に登り、自然湧出の仏世尊を祈り出し奉りて、此寺の本尊に安置せん」（一ウ）とおもへり。是によつて、靈龜二年の春、大峯にのほり尺迦か嶽にして祈請していはく、伝聞、此山は、是西天王舎城の東北に二の嶺あり。南を靈鷲山と名けて、慈悲山王を守護神とし、北を檀徳山と号して、金対蔵王是を鎮護す。爰に、吾朝宣化天皇即位三年に八万鬼神等集て、靈鷲山の艮の角を取て、日本国にをく。是を大峯となつく。檀徳山の坤の角」（二オ）を取てをり、是を金峯山となつく。故に此山は、是釈迦如来在常説法の梵場ならひなき淨刹也。然者、此刹に於て、弟子の心水清して濁なくは、如来の身月何は移らさらむやとて、足を跌、目を胸かすして祈る事、既に七昼夜也。於是天に声あつて告て曰、汝此山にして身心苦勞する事なかれ。泊瀬に詣して祈請すへしと。行基即此声に応し、大峯を下山して泊瀬に入て、しかるへき砌を」（二ウ）尋て、此事を祈らむとて山内を巡礼し給に、今観音のふませ給金対座のいまた彰れ給はさる前に、其辺にして一人の童子にあふ。行基悦て、上件の事を語て祈請すへき相応の地を尋ぬるに、童子答ていはく、汝か所求のことくの自然湧出の仏は、末代に相応せず祈るといふとも、更に其益あるへからず。我、汝か許に祈て、

能仁の像を模作し、所願を満足せしめて、未来の巨益を施すへし。然者」(三才)汝は先本所にかへり、わかゆかむをまつへし。我をは跡宮雄丸と名づく。光て忽然としてうせぬ。其時、行基は化児の告のこくとく、天部の郷にかへり、彼童子を相待処に、靈龜二年の卯月三日に約束のこくとく出来して、御衣木は云、何と問。行基のたまはく、いまたし。其時童子手をあけて西を招かれければ、難波津に年来埋れてありし流木、一夜のうちに、天部の西岸につく。是より此所を木津と」(三才)言伝たり。蓋此御衣木は、摩黎山の赤梅檀(アカウメノ)を兼てより童子の通力を以て此時を鑑、佐伯に命して安置し給と也。則童子此木を所持し新造に小屋を構へ籠居していはく、毎日一度の供物をは窓より備へし。努、力て仏所を謁(ウケ)ことなかれとて、同年の卯月八日よりはしめて七月十五日に造畢し。木屋を出て、行基に対して宣はく、今般造立し奉る所の釈迦牟尼仏の尊像は、祇園精舎の正身に毫釐も違」(四才)事あるへからず。精霊も又正心に無二無別なるへしといひて、其日の嘗時に至て、天に声あつて、長谷の観音はまたかへり給はすやといふ。童子答ていはく、さかなき大聖文殊の口かなとて、天に冲てみえ給はす。其跡を窺へは、造仏の柿と毎日の供膳、一も失せずしてあり。行基奇異の思にたへずして、其所に両種を埋て、五重の石塔を起立し給て今にあり。奇哉。長谷の観音、行基の所願に応して西天の舍婆提祇園精舎に詣して、正真」(四才)等身の像を移し給へる相好なれば、豈自然湧出の尊容に異なる事あらむやしるへし。此尊は、常行頭陀事の粧、世間に比類なき靈像にてましますことを、並に、行基、米尾寺

の毘沙門天王の像を刻彫し給事は、寺家の魔障をのそき、福智を円満せしめむかのための鎮守なりといへり。亦、当寺を久修園院と額する事は、釈迦如来久遠成道の儀を表し、祇園を修むるの心也。就中、此寺に掬水難得なるにより、行基、手」(五才)つから鋤鉏を取てぞ給ふ。行基の本地にてまします。故に覺母の智水清涼山より飛泉す。時に行基井水に臨て、影向の文殊を移し留給へは、則行基の面貌にして些子も違事なり。儼然として、いまにまします也。右此寺者、元正天皇靈龜二年の草創也。雖然、神龜二年に落慶す。此由聖武皇帝聞召て勅願の宸書をなし下さる。久修園院御寄進の地の事、」(五才)東者、男山内高尾峯を限る。南者、王餘魚河を限る。北者、米尾寺を限る。西者、大河を限る。将山蔭中納言を鎮守とし、龜道祖を以て護法神とあかむる。其意旨奈何となれば、此寺神龜二年の造立供養以後百五十年の星霜を送て、清和天皇の御宇、貞觀の比、淡海公五世の孫越前守藤原高房、西国に所知ありて、子息山蔭の中納言いまた幼少なりしを相具して、鎮西へ下向の時に、淀の河すえ穂積の橋の許に一人の鵜飼、龜を取て害せむとす。高房是を買取て水中に放」(六才)入て過行けり。日すてに晩しぬれば、河尻の津に宿す時に、嬭母の女房繼母の語をうけて最愛の一男山蔭中納言を水中へ墮入れ、偽てあやまらざる気色也。又、其折節河浪烈くして助くへき様、更になし。高房泣啼懂て南無大慈大悲の仏菩薩、今一度我子をみせ給へやとて、手をあはせては、此寺を拝し舷に臨てなき悲む処に、昨日買取て放つところの龜、かの幼稚の子を甲に載て河上へ浮出たり。高房是を見て夢かとも更にわきまへ

す。唯惘然」(六ウ)と抱とりて、即船よりあかり、此寺をさして詣り、本尊の御前に小兒を撫すへて高声に唱言。抑三世如来の大悲力、世間に超越すといへとも、無縁の衆生と不信の者とは定業を転し給事あたはすと聞に、深淵に入、幼稚を挙て再親に授給こと、世にためしなき御事也。若此兒恙無く生長せは、此寺を氏寺とし、御本尊を護の神と崇奉らむと呪願し、宿を経て、小兒を養育し、西国への下向を停止して都に帰上て、父子共に当寺に帰依渴仰」(七オ)し給こと又他なし。此小兒年闌て、かすの官を経て、山蔭中納言とは申ける。よつて、父高房船中にて、若此幼稚を再見は千手観音の像を造立すべき由、誓約して存生す。終に此願をはたさす。此故に中納言惣持寺の観音を造立して、亡父の願を遂畢。随て此観音を長谷の童子彫刻し給といふ事は、久修園院の常なき因縁朽すして、中納言の行化を助け給と申伝へ侍り。よつて納言は七男七女あつて富さかへ子孫繁盛して、老期には、此寺に隠」(七ウ)通し、仏に常随給仕し、命終の時に臨て誓願して曰、我此御本尊の加被によるか故に一期の朝恩おもひのま、なりき。然者、我靈魂大梵天王の眷属と成て威神力を得て、此勝寺を守護せむこと未来際を尽さんと云々。是によつて、納言を梵天と勧請して靈現殊に甚し。因亀道祖神の事、是者中納言再蘇生し給ふこと併只亀の恩徳也。然者、亀の恩を報謝せむとて納言の祭尊し給ふ社也。」(八オ)是につきてしるへし。亀はこれ世間出世の護りなる事をよつて、世上に簍を取て吉凶を相する事も亀の八卦を出すか故なり。出世の法に於ては、亀に水陸自在の徳ある故に、真俗不二邪正一如の妙典を浮木の

亀にたとへて、嵯峨瑞像東漸の時も中印度より龜茲国にいたり、吾朝龜山の麓に鎮座す。又此寺の牟尼尊も靈龜に発し、神龜に造功畢。よつて不斷に亀道祖に乗して利益を施し」(八ウ)給ふなるへし。

当寺靈龜年中画縁起等、普広院殿御代被召置於殿中粉失畢。而今經公家御沙汰以旧草模写之、可為将来龜鑑而已。大永四年二月吉日 青懂」(九オ)

(2) 福岡県八女郡大光寺藏『飛形山大光寺縁起』



『飛形山大光寺縁起』(1オ)



大光寺 (福岡県八女郡)

【書誌】『飛形山大光寺縁起』

(所蔵) 福岡県八女郡立花町大光寺(臨濟宗妙心寺派) (形態) 写本一冊、袋綴 (見返) 共紙 (外題) なし (内題) なし (丁数) 六丁(遊紙なし) (寸法)

二六・七×十八・八釐（字高）二三・五釐（料紙）楮紙（行數）半葉九行（藏書印）なし（奥書）「崑宝永三【丙戌】仲春上旬／二尊仏勅大光中興開基妙心派下了岳改古伝書（印）」（備考）大光寺は、福岡県八女郡立花町にある臨濟宗妙心寺派の寺院。袋綴の紙背にも、書き損じ（または練習）と思われる詞書が記されており、表の詞書と同文である。但し、紙背（一ウの紙裏）には、内題「飛形山大光寺縁起」と記されている。また、大光寺には、縁起と一緒に『寺録 保存品／大光寺』（写本一冊、大正十年写）が所蔵されており、縁起が長らく行方不明となっていたが、大正十年六月に発生した洪水の際に発見され、大光寺に奉納されたとある。なお、八女市立図書館が所蔵する『飛形山縁起』は、大光寺蔵『飛形山大光寺縁起』の写しである。また、『飛形山大光寺縁起』では、高房の子であるはずの山蔭の名が「黄門侍郎」となっている点が特徴として注意できる。寛政八十年（一七九六—一七九八）に刊行された『撰津国名所図会』（巻五）も山蔭を「黄門郎政朝」とする。

【翻刻】

筑後の国上妻郡北田村飛形山大光寺は、人王三十四代推古天皇十七年、百濟国より来朝の僧日羅聖人の開基する所也。本尊は則日羅自作の十一面觀世音、脇土善哉童子、八歳龍女、持国・廣目・増長・多聞の四天王、並二王の大像迄、皆日羅の造立にて堂塔伽藍草創の功をなせり。則推古帝の上奏に達し、補陀落山大光寺と勅額を賜て、寺門の繁栄、日々に新也。其後、星霜押移て、宝龜五年と申に雷火の為に

焼失せり。日羅彫刻の觀世音、諸天部に□□迄、不殘焼失成給ふ。唯二王のみ門境を□□□□（一オ）故、火災を遮れまします。呼々悲哉。惜哉。殿堂僧坊一時の灰燼と成し事、都は仏法流布の時至り堂塔伽藍造立の願主有之といへども、西海の邊鄙はいまだ人の心も邪欲無道にして仏の御名を知人希也。依て火災の後は再興の檀施もなく、元の堂地に松生て塵草私人もなし。唯二王のみ惡魔降伏の勢有といへとも門の瓦も落散て草路のために朽木の体と成給ふ時に、前の大僧正行基菩薩、諸国修行の折節、此山に登給ひ、堂塔の礎のみ残れる事を悲歎有て、暫く居をしめ十一面觀世音を彫刻あり。小堂を再建し、香（一ウ）華を備、□□□□読経怠転なきやうに、近境の諸相を勧化ましめて、行基菩薩は筑前の国へ移らせ給ふ。然るに、人王五十九代宇多天皇寛平の比、筑前太宰府の領主藤原高房と云し人常に觀世音に誓約を仰事、誠に深長也。大悲の尊像を作らんとて、支那より来朝せし仁僑と云者に金を渡し、白檀香木の大神を求しむ仁僑異国に帰り、放光白檀の靈木を求得て、亦日域に赴かんとす。時に唐朝の官府に聞えて是を赦さず。僑力及ばずして、即此木に書載していわく、此旃檀木長さ五尺六寸、幅三尺八寸、寄日本筑紫高房と書付て南海にぞ（二オ）流しける。高房は終に此木を待得ずして（卒ホセリ）。其子黄門侍郎と成て、宰府に移り巡見するに、此香木海畔に有て光を放つ。黄門あやしき挽引上させ見れば、誠に清涼の香に僑が題筆鮮也。黄門感信不淺、急ぎ亡父の遺意を報ぜんとて、此の香木を持て京師に赴きし時、摂州嶋下郡に至、暫く休居たるに、此

香木引共更に不^ズ動^ム。黄門驚^{アドロキ}、祈誓^{キセヒ}していわく、若^{モシ}此所の在^{ザイエン}縁ましまさば、尊容成就^{ソノヨウジヤウジュ}の後、此地に安置すべしとて引ければ、軽^{カロ}き事又元^{モト}の如し。黄門喜悅^{キエツ}の思^シひ□なし、先長谷寺へ参籠^{マツハセデラ}して、志願成就^{シクワン}良工^{リョウコウ}値遇^{チグ}の事を祈^イりける。七日に満ずる夜の御^ミ「(三ウ)告^{ツグ}に、急ぎ京師に至^{キョウシ}り候へ。必^キ仏工^{ブツク}を遣はすべしと示現^{ジケン}を蒙^{カモ}り、京師に上^リりて良工^{リョウコウ}を求^{モト}む。時に一人の童子、一刀を持来^ツり、われは仏工^{ブツク}也。尊容^{ソウヨウ}を造^{ツク}るべし。吾^{ワレ}に任^{マカ}せてんやと云。黄門悦^{ユエ}びかつあやしみ、此靈木二度得^{レイ}がたしとて、余木^{ヨボク}を以て試^{コハロミ}に造らしむれば、頗^{スゴク}る容貌絶妙^{ヨボハクセツ}也。依て一室^{シツ}をかまへて童子を居らしむ。童子千手を九句に成就^{ジユン}すべしと誓約^{セイヤク}して、室^{シツ}に入^{コト}り、戸^{コト}を開^{トサ}て出^デず。黄門も不犯^{フボン}潔^{セツ}精進齋戒^{シヤウジンサウカイ}して既に九句に充^{ミテ}しかば、戸を開^{アケ}て見るに、童子見^ミへず。唯千手大悲^{オウケ}の像のみ厳然^{ケンゼン}たり。是即長谷親音^{ハセ}の応化^{オウケ}ならんとて大^{オホ}きに歡喜^{クワンキ}し、其靈像誓約^{レイザウセイヤク}のこくとく撰^{セン}州嶋下郡^{シウシマジメ}に移し奉^{ホウ}る「(三オ)り一寺を建立^{コハロミ}し、亡父^{ハウフ}の冥福^{メイフク}をかたのごとくシ資薦^シす。かくて其身は、右試^{コハロミ}に作らしむる所の大悲^{ハクニ}の像^{ゾウ}を持^ホ奉^{ホウ}り、太宰府^{ダイサイフ}に帰^キ国^{コク}して、尊仰^{ソウヤウ}誓首案堵^{シユウアンド}せしむる処に、此大悲^{ハクニ}の像^{ゾウ}、夜々^{ヤヤ}光^{ミツ}を放^{ハナ}つて、筑後の方へ飛行^{カウ}ましめて、五更^{カウ}には亦飛^{カウ}帰^キせたまふ事、数日に及^{イタル}けり。黄門不思議^{ウカヒ}の思^シひをなし、前日より筑後へ打越^{コハ}、彼光明^{イタル}の至所^{ウカヒ}を窺^{コノフ}見るに、此補陀洛山^{コノフダラウ}の地に至^ミり給^{タマフ}ふ。黄門此山へ尋登^{コノミ}り拝見^{イタル}するに、一字の草堂^ウ有^{アル}て、十一面の尊像^{ヒキヤウ}立^ヒせ給^{タマフ}ふ。黄門歡喜^{クワンキ}信心^{シン}□□。即新^{アラタ}に堂閣^{カク}を建立^{ヒキヤウ}し、光明飛行^{ヒキヤウ}千臂^ヒの像^{ゾウ}を安置^{クワンキシン}し奉^{ホウ}る。其靈應^{レイオウヒヤウキ}響^{ヒヤウキ}の如し。此因縁^{インエン}「(三ウ)に依^イて、世に飛形山^{ヒカガタ}と云習^ユはせり。然るに、飛形山^{ヒカガタ}の仏閣^{カク}西むきに立^{タテ}給^{タマフ}へり。依^イて西海^{サイカイ}の面^{オモテ}に光明^{ミツ}を放^{ハナ}ち

給^{タマフ}ふ事、数月に及^{キヨレ}べり。漁獵^{リョリョ}の輩^{タビ}魚^{イサ}を得^ウる事なし。飢^{ウエ}に及^ツ由^ユ、託言^{ツゴト}再三^{サン}せり。寺僧^{ジソウ}、此由^{コノユ}を申上^{ウケ}、東むきに立^{タテ}せ給^{タマフ}ふとなり。是より漁人^{イサノヒト}等^ラ、魚^{イサ}を得^ウて家業^{カゲウ}を心能^{ココロ}せりと云々。かくて、星霜^{セイソウ}を送^{オウ}りける処に、応仁^{オウニ}の乱^{ラン}より、天正慶長^{テンセイセイカウ}の比^ヒに至^ミ迄、京都も田舎^{イナカ}も乱^{ラン}世^{セイ}の騷動^{サウドウ}止事^シなく、士民^{シミン}も五尺^{ゴシツ}の身を置^{オケ}に所なし。数年^{シウネン}の兵乱^{ヘイラン}に依^イて悲歎^{ヒタン}の愁^{ウレ}に身をやつし、邊鄙^{ベンビ}の土民^{ツミン}、大欲^{オホボク}無道の衆生^{シュウジヤウ}となり、一日^{イチニチ}の飢^{ウエ}も助^{タス}からん事を第一^{ダイイチ}とせり。爰^{コノ}に飛形山^{ヒカガタ}仏閣^{カク}の近軒^{キンケン}に、「(四オ)大木の五葉松^{ゴエツマツ}有^{アル}しを、彼無道人^{カク}登^{ノボ}りて切倒^{キリタラ}し、炭^{スミ}を燒^{ヤキ}、飢渴^{キカク}の助^{タス}にせんと燒立^{ヤキ}ければ、魔風^{マフウ}吹^フいて、本堂^{ホンドウ}に火移^ヒりしかば、膽^{イモ}を□し、打消^{タイシャウ}さむとしけれど、無^ム人の働^{ハタケ}不^レ叶^エして、山中^{ナカノ}深く逃隱^{ニウイン}れけり。折節^{セツセツ}、別の山人^{ベツノカネ}欠^{カケ}来^キり。斧^{ヲノ}を以て御厨司^{ミツクシ}を打破^{ヲノ}りけれ共、丈夫^{コウシヤウ}に拵^{ツク}たる厨子^{ツクシ}にて破^{カケ}るに力なく、魔風^{マフウ}強^{ツヨク}く吹掛^{フキケ}来^キれば、斧^{ヲノ}を打^ウ入^ウたる穴^{アナ}に手^テを入^ウり、千手の御手^{チヤウノミテ}を一つ引^ヒ欠^ケて取得^{キョク}たり。漸^{シヅカ}々命^{イナチ}恙^{シヤウ}なくして、御手^{ミテ}を持^ホて飛^{カネ}出^デけり。悲^{カネ}哉^カ。黄門侍郎^{オウモンシロウ}丹誠^{タンセイ}を尽^{ツク}されける長谷^{ハセ}の応化^{オウケ}もむなく□燒失^{ヤキ}成^{ナリ}せ給^{タマフ}ふ。其後は、誰^{タレ}人^ニして再興^{サイキョウ}の志願^{シケン}もなし。時の花香^{カウカウ}取^ツし源佐^{ゲンサ}と云し僧^{ソウ}「(四ウ)悲歎^{ヒタン}の余^{ヨリ}に一紙半錢^{イチシハネゼン}の勸化^{クワンカ}をなし、小堂^{コドウ}を構^{カマ}へ、千手の像^{チヤウノゾウ}を彫^{ハキ}刻^キして安置^{アンチ}し奉^{ホウ}る。夫より宝永^{ホウエイ}の今^{イマ}に至^ミる迄、百余歲^{ヒヤクニヤウサイ}に及^{イタル}へり。今爰^{イマ}に大神^{オホカミ}姓^{セイ}十時氏^{ジウジシ}惟一^{ユイ}、此山^{コノヤマ}に参詣^{サンキョウ}有^{アル}て、□□御手^{ミテ}の一つ残^{ノコ}れる事を悲歎^{ヒタン}有^{アル}。千手の像^{チヤウノゾウ}を再建^{サイケン}し、像^{ゾウ}の胸中^{キョウチュウ}に古^コき御手^{ミテ}を作り込^コめられ、飛形山^{ヒカガタ}寄進^{キシン}の時^{トキ}を待^{マテ}得^エたまふ処に、宝永三年^{ホウエイサンネン}に至^ミて、谷中^{ヤナチュウ}の村民^{シヤウミン}、寸誓^{セン}を起^キし、飛形山^{ヒカガタ}を此地^{コノチ}に引移^{ヒキ}し、仏勅^{ブツツク}某支配^{ミヤチ}たる事^{コト}を奉^{ホウ}願^{ガン}所に、望^{ノゾミ}の通^{トウ}り、支配^{シヤチ}の地^チに伝蒙^{デンモウ}り、草堂^{ソウドウ}「(五オ)一字^{イチジ}を再建^{サイケン}せしむ。此時

幸の時節とて、十時氏右の寄進仏を送らせ給ふ。依て寺の本尊に安置せしむるものなり。善男子善女人成仏の志願有人は中に不及。たとひ志願なき人たりとも、円通自在の槽を以て、信力堅固の船をあたへ、煩惱無尽の苦海を渡し、涅槃常樂の岸に至らしめ給わんとの大慈大悲の御願也。貴となく、賤となく、志有も志なきも押並て、只歩をはこび、暫時の間も忘念忘愚をはなれたまへ。無量の善縁となり給ふへし。又爰に二王の両像、数歳の先迄朽残れる。有惡逆無道（五ウ）の土民。一人登り、斧を以て二王の腰より上を馬の足輿にくり、首より上を以て手水輿をくり、持帰りけるに、家に至りて忽に二王のたゝりとして叫喚しけるが、其日の中にあがき死に死けり。其子孫今に有といへども惡病たへずと聞く。皆人顯然の事共也。今朽木の一体残れる有。是のみ日羅聖人の手形と云々。日羅の開基より、今宝永三年に至て千九十八年に成也。此日羅聖人は、敏達天皇十二癸卯□、天皇の命に應じて来朝し給ふなり。此時異朝にては□文帝開皇三年也。此時より今宝永三年まで千百廿四年（六オ）に成なり。

（飛形山之略史伝 一片）（後筆力）

皆宝永三丙戌仲春上旬

二尊・仏勅・大光中興開基妙心寺派下丁岳改古伝書」（六ウ）

「謝辞」資料の閲覧掲載に際し、度々の御高配を賜った開運寺住職（大光寺兼）池上寛道師、久修園院松本文子氏、国立歴史民俗博物館に御礼申し上げる。本稿は、二〇〇七年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、二〇〇八年十月十七日付）。